

続文化は、
今に生きる

権の寒の 板屋を走る 夜寒か 声

な (加藤暁白)

灯あかるき 大路に出たる けり

夜寒かな (高浜虚子)

母ト二人 イモウトヲ待ツ かな

夜寒力ナ (正岡子規)

停車場に 夜寒の子守 旅の我 かな

夜寒さや 煙草尽きたる 汽 けり

車の中 (寺田寅彦)

妻子は夙に眠り、われひと びにけり

り机に向ひつゝ (野村喜舟)

(広瀬惟然) 寒さかな

美しき 寒夜の影を わかち

(西東三鬼)

山茶花の 苔(こぼろ)、寒さか

井のもとへ 薄刃を落す 寒さ

(芥川龍之介)

寒江に 網うつことも なかり

(高浜虚子)

さむさむと 地の裏へる 夕鴉

(飯田龍太)

眼が見えぬ 人の夜を澄む

ちは、これで先生も回復するの

(飯田蛇笏)

しかもこのような大事に際し、
そのようなことを口にするこ
言語道断。弟子の風上にも置け
ぬ不届者。同席するのも汚らわ
しい。さうさこの場から立ち去
れ」ときびしく叱りつけました。

支考はすつかり面目を失い、悄
然となつてしまいました。しか
し考えてみると全く去来のいう
通りです。深々と頭をさげ、黙
つて座を立ちながら、傍らの広
瀬惟然に、「我に句あり、そこに
書給へ」といつて、

座がパツと明るい光が
さすおもいがしました。さかな 支考

弟子のなかで特に才智
にたけた各務支考は、
そのような先生の状態
を見て、絶好の機会だ
からこの際家集出版の
許可を得たらどうだ
ろうと、提案しました。

これを聞いた向井去
来は激怒し、「日頃先
生は名利名聞を求め
ず、まして生前に家集
出版のことなど厳にい
ましめていたことだ。

でも、
路のとうことしもこに路の
とう (種田山頭火)

せきをしめても ひとり
(尾崎放哉)

しんしんと しんそこ寒し 小
行灯 (小林一茶)

さかな 支考

間でのやりとりを耳にしてい
た芭蕉は、病み衰えた顔に思わ
ず微笑を浮かべた、と古い書物
に記されています。」

寒い季節に

深澤芳樹

咳一つ 赤子のしたる 夜寒か

な (芥川龍之介)

あはれ子の 夜寒の床の 引け

ば寄る (中村汀女)

綿入に 着かへて坐る 夜寒か

な (松瀬青々)

凍たれて 独暮をうつ 夜寒

かな (与謝蕪村)

鯛の骨 たたみにひらふ 夜

寒かな (室生犀星)

みつかめの なまこに似たる

夜寒かな (小津安二郎)

夜寒さや カンテラとぼす

路普請 (芥川龍之介)

寒さ、寒しは、冬の季語。

葱白く 洗ひたてたる 寒さ

かな (松尾芭蕉)

易水に ねぶか流るる 寒さ

かな (与謝蕪村)

藍壺に きれを失ふ 寒さか

な (内藤文草)

くれなるの 色を見てゐる

寒さかな (細見綾子)

引張て ふとんぞ寒き 笑ひ



薪に雪つもる 山下一海他『俳句の本』

写真 (朝日出版社) から (深澤芳樹写)

路のとうことしもこに路の
とう (種田山頭火)

でも、
路のとうことしもこに路の
とう (種田山頭火)

せきをしめても ひとり
(尾崎放哉)

しんしんと しんそこ寒し 小
行灯 (小林一茶)

間でのやりとりを耳にしてい
た芭蕉は、病み衰えた顔に思わ
ず微笑を浮かべた、と古い書物
に記されています。」

さかな 支考

弟子のなかで特に才智
にたけた各務支考は、
そのような先生の状態
を見て、絶好の機会だ
からこの際家集出版の
許可を得たらどうだ
ろうと、提案しました。

これを聞いた向井去
来は激怒し、「日頃先
生は名利名聞を求め
ず、まして生前に家集
出版のことなど厳にい
ましめていたことだ。